「二宮翁夜話」

3/8 修身

五、 「三界無安猶如火宅」（妙法蓮華経譬喩品第三）

P.40 「迷うかゆえに三界は城なり。」 P.55（一九）にも出ている。

三界（さんかい）＝衆生が生死を繰り返しながら輪廻する世界を三つに分ける。三有ともいう。

・欲界（淫欲・食欲の本能的な欲の強い衆生が住む世界）―最下に位す。

・色界（物質的な世界）

・無色界（精神的な世界）―最上位

七、

P.43

報徳訓

父母根元在天地、令命身体、根元在父母、生育子孫、相続在夫婦、丹精父母、富貴在祖先、勤功吾身、富貴在父母、積善子孫、富貴在自己、勤労身命、長養在衣食住、三衣食住、三在田畠山林田畠山林、在人民、勤耕今年、衣食在昨年、産業来年、衣食在今年、艱難年々歳々不可忘報徳

二宮尊徳翁 百八文字の人生訓

報徳訓

父母の根元は天地の令命に在り
身体の根元は父母の生育に在り
子孫の相続は夫婦の丹精に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
吾身の富貴は父母の積善に在り
子孫の富貴は自己の勤労に在り
身命の長養は衣食住の三に在り
衣食住の三は田畑山林に在り
田畑山林は人民の勤耕に在り
今年の衣食は昨年の産業に在り
来年の衣食は今年の艱難に在り
年々歳々報徳を忘るべからず

佛告阿難。及韋提希。此想成已。次當更觀。無量壽佛。身相光明。阿難當知。無量壽佛身。如百千萬億。夜摩天閻浮檀金色。佛身高。六十萬億。那由他恒河沙由旬。眉間白毫。右旋婉轉。如五須彌山。佛眼如四大海水。青白分明。身諸毛孔。演出光明。如須彌山。彼佛圓光。如百億。三千大千世界。於圓光中。有百萬億。那由他恒河沙化佛。一一化佛。亦有衆多。無數化菩薩。以爲侍者。無量壽佛。有八萬四千相。一一相。各有八萬四千。隨形好。一一好。復有八萬四千光明。一一光明。徧照十方世界。念佛衆生。攝取不捨。其光明相好。及與化佛。不可具說。但當憶想。令心眼見。見此事者。即見十方。一切諸佛。以見諸佛故。名念佛三昧。作是觀者。名觀一切佛身。以觀佛身故。亦見佛心。佛心者。大慈悲是。以無緣慈。攝諸衆生。作此觀者。捨身他世。生諸佛前。得無生忍。是故智者。應當繫心。諦觀無量壽佛。

【一七】仏、阿難および韋提希に告げたまはく、「この想成しをはらば、次にまさにさらに無量寿仏の身相と光明とを観ずべし。阿難まさに知るべし、無量寿仏の身は百千万億の夜摩天の閻浮檀金色のごとし。仏身の高さ六十万億那由他恒河沙由旬なり。眉間の白毫は、右に旋りて婉転して、〔大きさ〕五つの須弥山のごとし。仏眼は四大海水のごとし。青白分明なり。身のもろもろの毛孔より光明を演出す。〔大きさ〕須弥山のごとし。かの仏の円光は、〔広さ〕百億の三千大千世界のごとし。円光のなかにおいて、百万億那由他恒河沙の化仏まします。一々の化仏にまた衆多無数の化菩薩ありて、もつて侍者たり。無量寿仏に八万四千の相ましまします。一々の相におのおの八万四千の随形好あり。一々の好にまた八万四千の光明あり。「一々の光明は、あまねく十方世界を照らし、念仏の衆生を摂取して捨てたまはず。」その光明と相好と、および化仏とは、つぶさに説くべからず。ただまさに憶想して、心眼をして見たてまつらしむべし。この事を見るものは、すなはち十方の一切の諸仏を見たてまつる。諸仏を見たてまつるをもつてのゆゑに念仏三昧と名づく。この観をなすをば、一切の仏身を観ずと名づく。仏身を観ずるをもつてのゆゑにまた仏心を見る。仏心とは大慈悲これなり。無縁の慈をもつてもろもろの衆生を摂す。この観をなすものは、身を捨てて他世に諸仏の前に生じて無生忍を得ん。このゆゑに智者まさに心を繫けて、あきらかに無量寿仏を観ずべし。

夜摩天 六欲天の第三。須弥山の頂上から八万由旬にその天宮があり、五欲の楽を受けるという。

白毫 仏の眉間にあり、右に巻いている白い細毛で、そこから光を放たれる。仏の三十二相の一。↓三十二相※

仏眼 仏の眼。すべてを見渡し、一切を知る眼。

四大海水 須弥山をとりまく四海のこと。

青白分明 浄らかに澄みきっているさま。

円光 仏・菩薩の頭頂の背後から放たれる円形の光明。

憶想 心におもいうかべること。※

無縁の慈 平等にして無差別な仏の大慈悲。↓三縁[2]

10. p47. 中庸

第一章

天の命ずる之を性と謂い、性に率う之を道と謂い、道を修むる之を教と謂うなり。

道なる者は、須臾も離る可からざるなり。離る可きは道に非ざるなり。是の故に君子は其の睹ざる所に戒慎し、其の聞かざる所に恐懼す。隠れたるより見わるるは莫く、微しきより顕らかなるは莫し。故に君子は其の獨りを慎むなり。

喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂い、發して皆節に中る、之を和と謂う。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す。

二、p.48 五倫＝儒教で人として守るべき五つの道
『孟子』父子之親、君臣之義、夫婦之別、長幼之序、朋友之信
五常＝儒教で人の常に守るべき五つの道徳
仁、義、礼、智、信
一四。p.51 「一以貫之」（『論語』里仁第四、p.43）
一五。p.52

『孝経』

開宗明義章第一

仲尼居し、曾子侍せり。子曰わく、先王至徳要道有り、以て天下を順にす、民用って和睦し、上下怨むこと無し。汝之を知るか。曾子席を避けて曰わく、参不敏なり、何ぞ以て之を知るに足らん。子曰わく、夫れ孝は、徳の本なり。教の由って生ずる所なり。復り坐せよ、吾汝に語らん。身体髪膚、之を父母に受く、敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行い、名を後世に揚げ、以て父母を顕すは、孝の終りなり。夫れ孝は、親に事うるに始まり、君に事うるに中し、身を立つるに終る。大雅に云わく、爾の祖を念うこと無からんや、厥の徳を聿べ脩むと。

孝經

開宗明義章第一

仲尼居、曾子侍。子曰、先王有至德要道、以順天下。民用和睦、上下無怨、女知之乎。曾子避席曰、參不敏。何足以知之。子曰、夫孝德之本也。教之所由生也。復坐。吾語女。身體髮膚受之父母。不敢毀傷孝之始也。立身行道、揚名於後世以顯父母孝之終也。夫孝始於事親、中於事君、終於立身。大雅云、無念爾祖。聿脩厥德。